クトルグ可汗の遺跡の複合施設と碑石(国際テュルク・アカデミー・モンゴル科学アカデミー考古学研究所“ノムゴン2019、2022”共同調査隊による予備的報告)

著者	ダルハン クドゥラリ, アルタンゲレル エンフトル, ナピル バズィルハン, ヌルボラト ボーゲンバエフ, ツェレンハン ボヤンヒシグ, ゴンチグ バトボルド, 大澤 孝(訳)
著者別表示	Darhan KUDYRALI, Altangerelin ENKHTOR, Napil BAZYLKHAN, Nurbolat BOGENBAYEV, Tserenkhandin BUYANHISHIG, Gonchigiin BATBOLD, OSAWA Takashi [trans.]
雑誌名	金大考古
号	82
ページ	48-65
発行年	2023-03-31
URL	http://doi.org/10.24517/00069163

Creative Commons : 表示 - 非営利 - 改変禁止
http://creativecommons.org/licenses/by-nc-nd/3.0/deed.ja

クトルグ可汗の遺跡の複合施設と碑石

（国際テュルク･アカデミー・モンゴル科学アカデミー考古学研究所“ノムゴン 2019、2022”共同調査隊による予備的報告）

ダルハン・クドゥラリ *
アルタンゲレル・エンフトル **
ナピル・バズィルハン ***
ヌルボラト・ボーゲンバエフ ****
ツェレンハン・ボヤンヒシグ *****
ゴンチグ・バトボルド ******
（大澤 孝 訳）

Ⅰ．はじめに

遺跡の複合施設が発見された場所（ノムゴン）

モンゴリアのアルハンガイ県（アイマク）ハシャート郡（ソム）で、“ノムゴンの渓谷”と名付けられた谷には 9 基の古代テュルクに関する遺跡の複合施設がある。ノムゴン渓谷の北西にはイフ・ノムゴン山で、その南東ではバガ・ノムゴン山で囲まれている。遺跡の複合施設の北端では“ホグノ - ハン”と名付けられた鋭く切り立った峰をもつ高山が控えている。この山の前面の南側では、“Elsen tasarhai”(砂の部分) と名付けられた純粋の砂丘 (訳補 1 が西から東へ数十 km も続いている。タルナ河はこの砂丘の南へと流れている。

(訳補 1　ここでは風成砂丘を指すと思われる。

* 国際テュルク・アカデミー所長、教授、博士 (カザフスタン、アスタナ)
** モンゴル国科学アカデミー考古学研究所 中世部門室長、博士、准教授
*** 国際テュルク・アカデミー 専門研究者、博士 (カザフスタン、アスタナ)
**** 国際テュルク・アカデミー 専門研究者 (カザフスタン、アスタナ)
***** モンゴル国科学アカデミー考古学研究所 中世部門室長、修士
****** モンゴル国科学アカデミー考古学研究所 中世部門研究員、博士

Ⅱ．研究史

“ノムゴン”の遺跡の複合施設は最初、2000 年にモンゴル国で著名な考古学者で歴史学博士のドゥブドイン・バヤル教授が地元の体育教師 G. ドンドフを介して発見し [Bayar 2010]、その情報が発表された [Bayar 2012:6-25 ; Bayar 2014:106-124]。2001 年に考古学者の A. エンフトルはこの複合施設を個人的に調査して、図面を作成した。9 基の遺跡の複合施設の一般的特徴は“ノムゴン -1 ～ 9”として登録された [Enkhtor 2001: 25]。さらにその後、この遺跡の複合施設の表面調査が 2007 年に A. オチル、Ts. オドバータル、I. エルデネボルド、B. アンフバヤルによって行われた [Ochir *et al.* 2019]。ノムゴン渓谷にある遺跡の複合施設は 2012 年にモンゴル文化遺産センターによっても調査された [Enkhbat *et al.* 2012:40-41; Enkhbat *et al.* 2013:86]。

地元住民が説明したところでは、ノムゴン渓谷は古来、富裕な、そして力のあるものたちが住んでいたという。そして 1930 年代には赤軍が略奪行為をここから開始した。

この碑文の複合施設では今日までデータを伴う学術研究や考古学的発掘は行われてこなかった。今回の作業では、ノムゴン渓谷にある遺跡の複合施設を以下に記した順に扱う予定である。上述の複合施設の石像と遺跡の石類は本来の場所からかなり離れた場所へ運ばれたり、(場所が) 変えられたりしたようである。

■ノムゴン第 1 遺跡の複合施設

ノムゴン渓谷の他の遺跡の複合施設の南東に位置するノムゴン第 1 遺跡は、渓谷の最初の複合施設である (訳補 2。バルバルの列石はどうかというと、発

(訳補 2「本遺跡は幹線道路から北へ約 700m のイフ・ノムゴン渓谷の南端にある。土壁には東向きの門がある。城壁の長さ 53m、幅 42m、厚さ 8m。壁の中央は空洞になっている。青灰色の屋根瓦の断片が川状に散在している。その左側に頭部の欠けた男性の座像があった。石人の手前 2.6m、石人の下部断片下には穴が出来ている。施設の規模は 24.1 × 18.3m。」―モンゴル語報告文からの引用。

「複合施設からは、頭、両腕はなく、ベルトと足下が連続してみられる一人の可汗に関係すると理解される一体の石像が見つかった。土の形状からはこの

見された遺跡の複合施設のバルバル石の多くは無くなってしまっていた (図 1)(訳補 3。

■ノムゴン第 2 遺跡の複合施設

ノムゴン第 1 遺跡から 500m 北に位置する。土壌の形状から、複合施設が方形であることがはっきりと見て取れる。この複合施設の内部では 1 つの犠牲石、雄羊の石像と様々な石像断片とバルバル石がある (訳補 4。

■ノムゴン第 3 遺跡の複合施設

ノムゴン第 2 遺跡から 350m 西方に位置する。複合施設には石棺に関係したとおぼしき 2 枚の平たい石がはっきりとみられる (訳補 5。

■ノムゴン第 4 遺跡の複合施設

ノムゴン第 3 遺跡から 200m 西方に位置する。複合施設は窪んだ水準の土壌の上に建造された。この複合施設では 2 つの石棺 (石槨) の石、2 体の人の石像、1 つの立石が見つかっている (訳補 6。

図 1　ノムゴン第 1 遺跡 (石人とバルバル、2018 年)

■ノムゴン第 5 遺跡の複合施設

ノムゴン第 4 遺跡から 500 m西方に位置する。複合施設では 2 つの石棺 (石槨) のその石と東方に立ったバルバル石が見つかっている (訳補 7。

■ノムゴン第 6 遺跡の複合施設

ノムゴン第 5 遺跡から 400m 西方に位置する。の複合施設では 1 つの石棺 (石槨) 石が見つかっている (訳補 8。

複合施設が、長方形であることが理解される。(城壁の入り口から東へ 200m 離れた地点には 11 個の石が並んでいた」—モンゴル語報告文からの引用。(本翻訳では 2022 年出版の *Археологийн судлал, m.41*(『考古学研究』41 巻) 掲載のモンゴル語版報告をモンゴル語版と簡称する。書誌情報は p.66 参照)。

(訳補 3 『モンゴル考古学 2019』の報告によれば、ノムゴン第 1 遺跡の GPS は北緯 47° 20' 33.2"、東経 103° 34' 68.6"、海抜 1206m である。

(訳補 4 『モンゴル考古学 2019』の報告によれば、ノムゴン第 2 遺跡の GPS は北緯 47° 20' 33.22"、東経 103° 34' 68.6"、海抜 1206 m。

(訳補 5 「ノムゴン第 2 遺跡の複合施設から北へ約 600m の地点にある。2 つの正方形の石槨が平行に配置されている。施設の東側に板石はなく、北西側に大きい平らな石板がある。石板は地面から 13cm 突き出ている。大きさは 230 × 232cm。次の石槨板は北側の石槨板から 37cm 離れて平行して配置されている。北側と南側には地上から 29cm の高さの大きな平らな石囲いが残されている。北側の板石は 68 × 10cm で、外側に小さな詰め石がある。南側の板石のサイズは 110 × 24cm である。石囲いの大きさは 267 × 330cm である。板石の表面には文様はない。また石 (石像やバルバル石を指す：著者補) が立てられたかどうかは不明である。」—モンゴル語報告文からの引用。また『モンゴル考古学 2019』の報告によれば、ノムゴン第 3 遺跡の GPS は北緯 47° 19' 17.3"、東経 103° 21' 31.9" 、海抜 1343 m。

(訳補 6 「先の遺跡から右へ約 100 m の地点にある。土盛りに 1m ほどの薄い平石がある。板石は右に倒れていた。柵石の表面に文様はない。大きさは 140 × 68cm。」—モンゴル語報告書からの引用。また『モンゴル考古学 2019』の報告によれば、ノムゴン第 4 遺跡の GPS は北緯 47° 20' 50.7"、東経 103° 34' 39.5" 、海抜 1205m。

(訳補 7 「ノムゴン第 4 遺跡の北に約 200m、イフ・ノムゴン渓谷の北端に位置する。37 × 37m の長方形の土壁構造である。壁の厚さは 4.1 m。壁の内部には、南西と北西の角に正方形の石槨がある。北側の石囲い板の前に男性座像がある。壁の中央には羊像がある。壁の内側左端にも断片石がある。北西隅にある石槨の左側の石槨に男性座像が立っている。石囲いの大きさは 280 × 286cm である。左側には 110 × 12 cm　の板石が地面から 5cm 突き出ている。石囲いの前には小さな積み石がある。石垣があるかどうかは不明である。石槨北側の板石は 160 × 22cm。2 つ目の石囲いの左側と正面にある板石があり、左側の板石は 90 × 10cm、地面から 5cm 露出している。前側の板石の大きさは 190 × 12cm である。地面から 26cm 突き出ている。右側や後ろ側に板石はなく、石囲いの外側には、積み石がある。入り口や壁の外側には石の存在は知られていない。」—モンゴル語報告文からの引用。『モンゴル考古学 2019』の報告によれば、ノムゴン第 5 遺跡の GPS は北緯 47° 20' 956"、東経 103° 34' 653" 、海抜 1206m。

(訳補 8 「ノムゴン第 5 遺跡の左側、約 500m の場所に

■ノムゴン第 7 遺跡の複合施設

ノムゴン第 6 遺跡から 500m 西方に位置する。遺跡の複合施設は 2 体の人像断片と 2 体の獅子像断片が見つかっている。この複合施設からは 62m の間隔をおいて 2 体の石人像、3 つの石像の断片、1 つの石棺が見つかっている（訳補 9）。

■ノムゴン第 8 遺跡の複合施設

ノムゴン第 7 遺跡の複合施設の 1,2km 北西に位置する。遺跡の複合施設では 2 体の石人像と 1 体の獅子像が見つかっている（訳補 10）。

■ノムゴン第 9 遺跡の複合施設

ノムゴン第 8 遺跡の複合施設の 3,2 km 北方に位置する。バガ・ノムゴン山の頂にある遺跡の複合施設は石積みの形状で、この複合施設の構造は発掘調査の後に、順番に発表される予定である（訳補 11）。

1. 目的

上で簡略的に述べた 9 つの遺跡の複合施設において、最初の考古学的発掘を実現させることを目的とした共同調査が 2019 年に開始された。作業をするにあたって、犠牲石を伴う事から一人の可汗に関する可能性があると評価されたノムゴン第 2 遺跡の複合施設から開始することが取り決められた。ノムゴン渓谷での調査目的は大規模な考古学的発掘を実施して、当範囲における複合施設の構造と他の遺物を明るみにして、それらの特徴を相互理解し、遺跡の複合施設が建造された年月を明らかにすること、そして古代テュルクの遺跡の複合施設の歴史的文化的重要性を明らかにすることである。

2. 研究方法

Bilge Qaγan ビルゲ可汗（訳補 12）と Kül Tegin キュル

ある。方形の土壁である。壁のサイズは 44 × 38m である。壁の厚さは 7.3m、壁の内側、右端に 2 つの石囲いがある。壁の西、北東、東の部分にも隆起した土構造である。城壁の外側全部には、壁に隣接して高く盛り上がった土の構造物がある。城門があるかどうかは不明である。城壁の東側には、東に約 40m にわたって 3 列のバルバル石が続いていっている。北側に 6 個、真ん中の列には 4 個、前の列には 4 つの石があり、すべて倒されている。」―モンゴル報告書からの引用。『モンゴル考古学 2019』の報告によれば、ノムゴン第 6 遺跡の GPS は北緯 47° 21’ 217”、東経 103° 34’ 646”、海抜 1206 m。

（訳補 9「第 6 遺跡の北、約 700m に位置し、バガ・ノムゴンの南の台地にある家屋（ゲル）の左側、約 100m 離れている。四角状に積み上げられた遺跡がある。寸法は 21 × 22.5m。表面は草で覆われ、よく伸びている。突き出た遺跡の外側の北側と東側にはわずかなくぼみが観察される。建物の周囲に掘られた溝の跡かもしれない。 遺跡の主要部分にはひとつの犠牲用石囲いがある。 石囲いの左右の表面には壁の模様が彫られている。石囲いの大きさは 230 × 290cm。 左側の石囲いは 220 × 13cm の大きさで、きめの細かい白灰色の花崗岩からなり、外側に壁の模様が彫られている。石囲いは表土から 52cm 露出している。南側の板石は 124 × 14cm の大きさで、薄く平らな花崗岩片からなる。 地面から 28cm 突きでている。右側の板石は 180 × 13cm の大きさで、表土から 62 cm 上に露出している。 北側の板石は 155 × 13cm で、表土から 10cm 突き出ている。」―モンゴル語報告文からの引用。『モンゴル考古学 2019』の報告によれば、ノムゴン第 7 遺跡の GPS は北緯 47° 21’ 217”、東経 103° 34’ 684”、海抜 1206 m。

（訳補 10「ノムゴン第 7 遺跡から北へ約 400m。」―モンゴル語報告文からの引用。『モンゴル考古学 2019』の報告によれば、ノムゴン第 8 遺跡の GPS は北緯 47° 21’ 634”、東経 103° 34’ 384”、海抜 1206 m。

（訳補 11「ノムゴン第 9 遺跡から北へ約 50m の場所にある。はねがね草で覆われている凹凸のある土盛り構造からなる。遺跡の外側には土壁が見える。サイズは 26 × 22.5m。壁の厚みは 5m。川のマウンド中央には石囲いがある。サイズは 240 × 252cm。石囲いの四隅には、きめ細かい白灰色の花崗岩に溝を切り込んで、溝に板石をはめ込んでいる。石囲いの北東角に切込をもっていた垂直に切り立っていた石は欠けている。石囲いの右側には板石が残されている。他の板石は破壊されている。残りの板石には、外側にモチーフが描かれている。板石のサイズは 211 × 11cm である、表面から 40cm　突き出ている。石囲いの中には、埋もれた状態で、きめ細かい黄色い花崗岩製の石人像が突き出ている。寸法は長さ 57cm、幅 20cm。南東角の溝跡のついた花崗岩石は 58 × 30 × 18cm で、溝の寸法は 10 × 8cm である。南西角に溝あとのついた花崗岩石は 65 × 32 × 32cm で、溝の寸法は 10 × 8cm である。北西角の溝跡のついた花崗岩石は 62 × 28 × 28cm で、溝の寸法は 10 × 9cm である。」―モンゴル語報告文からの引用文。本遺跡の GPS に関しては不明。

（訳補 12 以後、本稿では「ビルゲ可汗」と表記する。

テギン（訳補 13 の遺跡の複合施設とは、約 60km 離れたノムゴン遺跡の複合施設の考古学的発掘調査においては、層序、地形、地図作成、比較類型、文化層 (土壌層)、歴史学的対比、碑銘学的調査などの方法が広く用いられた。発掘の各層では、発掘区域と出土遺物が写真とスケッチで記録された。また先端技術を用いつつ、100 ～ 400m の高度から写真やビデオで撮影することも行われた。この撮影のためにはドローンが使用された (図 2)。発掘区域に見つかった獣骨は放射性炭素の分析のために実験室に送られた。古代テュルク語、ソグド語とブラーフミー文字の碑文に対して記録と調査が行われている間、考古学的比較方法が用いられた。

Ⅲ．結果

1. ノムゴン第 2 遺跡の複合施設における 2019 年の考古学的発掘 (1

遺跡施設の全面積は 60m の長さ、40m の幅の範囲である。遺跡の複合施設の発掘調査ではまず、雄羊の石像と犠牲石が見つかった。西から東へ延びた複合施設の四方は溝によって、そして押して圧縮した土壌からなる側壁に取り囲まれている。遺跡の複合施設では、かつて門であったその上部に屋根で覆われた墓廟建物があったことがマウンドに散らばった瓦断片と粘土でコーティングされた残存物から了解される。この複合施設の西側では、その中央に穴があいた犠牲石が見つかっている (図 5)。

遺跡の複合施設の外側は、青色の花崗岩製のバルバル石で取り囲まれている。このバルバルは地上付近でみられるものは 11 個ある。遺跡の複合施設の前方、すなわち、東側に向いてまっすぐ、47 個のバルバルの存在が確かめられた。これらバルバル石のすべてが破壊された状態であった。数点のバルバル石は地中に埋められており、破壊されていた。地中に埋められた状態にあるバルバル石のいくつかは端しか見えないものもある。このバルバル石の 2 つには可汗の系譜である Eşir [Mönkhtulga 2019] (Aşina) のタムガのあることが確かめられた（訳補 14。2

(訳補 13　訳者は Köl Tigin/Tegin キュル・テギンの転写を是とするが、ここではトルコ語報告書の表記に従う。

(1 (プロジェクト名の)“ ノムゴン 2019” の共同発掘調査に対して、国際テュルク・アカデミー側からダルハン・クドゥラリ、ナピル・バジルハン、ヌルボラト・ボーゲンバエフ、モンゴル科学アカデミー側からはモンゴル科学アカデミー考古学研究所の研究員アルタンゲレル・エンフトル博士兼准教授、相談役の考古学者として、モンゴル科学アカデミー考古学研究センター長のダムディンスレン・ツェヴェーンドルジ (1949 ～ 2022 年)、考古学者のサラントヤ・ダランタイン、ツェレンハン・ボヤンヒシグ、ニャムフー・ムンフバトが参加した。またモンゴル国教育大学歴史学科の学生たちも発掘調査のメンバーとして参加した現場では、2019 年 7 月 1 日～ 30 日の 30 日間の発掘調査が行われた。

(訳補 14　ここで Eşir と転写された語の本来の突厥文字碑文からの翻字は s/şir である。これまでの通説では「スィル sir/ シル şir」と転写されてきた。ノムゴン遺跡の本報告者たちは、これを「エシル eşir」と転写し、これを突厥王族の氏・部族姓の「阿史那」(中古音 *’*â-ş-nâ*」)[Karlgren 1972: 15, 257, 100] に対応することを提唱したモンゴルの考古学・文献研究者 R. ムンフトルガの新説 [Mönkhtulga 2019] に依拠したもので、本遺跡のモンゴル語版報告でもこの説が採られている。勿論、突厥文字の sir を esir と転写する事例は、カザフの文献学者 G. アイダロフが試みて、これを「捕らえられた突厥人」と訳した読み [Айдаров Г., 1971, Язык орхонских памятников древнетюркской письмености VIII века, Алма-Ата: 324, 326] の転写面だけを採用し、それを阿史那 ashina に比定しようとしたものであるが、彼の案は音韻的にもテキストの文脈的にもそぐわず、到底容認できない。

この「スィル sir/ シル şir」という用語に関しては、V. リバツキーが詳細に研究史をまとめており、極めて便利である [V. Rybatzki, 1997, *Die Toňuquq-Inschrift,* (*Studia Uralo-Altaica 40)*, Szeged: University of Szeged: 79-82, note 222 を参照]。トニュクク碑文では türk sir bodun (第 3 行、11 行目)、türük sir bodun(第 60、61 行目)、türük sir bodunug(第 62 行目) に記されている。既に研究史の初期段階で、ドイツの中国史学者 F. ヒルトはこれをテュルク系部族の薛延陀 *Xueyantuo*「中古音 **siat-jian-tha*」[Pulleyblank E. G., 1991, *Lexicon of Reconstructed Pronunciation in Early Middle Chinese, Late Middle Chinese, and Early Mandarin*, Vancouver: UBC Press: 356, 351,314] の薛 *Xue* (中古音 **siat*) に比定する見解を出し、上記の個所を「突厥と Sir の部民 (を)」と解釈した [Hirth F., 1899, Nachworte zur Inschrift des Tonjukuk, *Alttürkischen Inschriften der Mongolei II*, St. Petersburg: 129-140]。ビルゲ可汗碑文では東面第

1 行目に (al)tï Sir と記され、続いて、Toquz Oγuz「九姓オグズ族」、Ekki Ediz「二姓エディズ族」と列挙して記されている事から (al)tï Sir が「六姓 Sir 族」と部族名として解釈できる。またイフ・ホショート碑文東面 9 行目には Sir/Šir irkin「スィル / シル・イルキン」と称号中に見られる。このイフ・ホショート碑文での用例を T. テキンはイラン語の形容詞とみている [Tekin T., 1968, *A Grammar of Orkhon Turkic*, Bloomington, Indiana University publications: 369]。ただ管見の限りでは、「チョル」という突厥の高官に与えられる官称号の前に付されていることからすれば、ここは通常、官称号の一部や名前などの普通名詞が来ることが期待される。これまでの研究を俯瞰すると、ビルゲ可汗碑文およびイフ・ホショート碑文の Sir の用語の解釈については、ほぼ (テュルク系) 部族名としての解釈が優勢である。しかしトニュクク碑文の用例に関しては様々な転写と解釈が提起されてきたのも事実で、大まかに言えば形容詞とみる説と固有名詞とする説に分かれる。

形容詞とみる場合、(1)sir をマフムード・アル・カーシュガリーの『トルコ・アラビア語百科事典』に見られる sär「固持する」という語とみて、「固い」、「団結した」という解釈を採って、「団結したテュルク人 」[Thomsen V., 1924, Alttürkıschen inschriften aus der Mongolei in Übersetzung und mit Einleitung, *Zeitschrift der Deutschen Morgenländischen Gesellschaft, vol.78 3/4*: 121-175; 小野川秀美 1943「突厥碑文譯註」『満蒙史論叢』4, 日満文化協会 :p.143 註 186、p.152 註 243 を参照] のように形容語として読む説が挙げられる。その他、T. テキンはこれを 'Turkish Sir people'「テュルクの Sir の部族」と読んでおり、Türk を Sir に係る形容語とみている [Tekin T., 1968, op. cit.:283]。そして、この Sir の解釈については、先のヒルト説を支持している。

別の形容語説としては、(2) コータン・サカ語の śśära、ソグド語の šyr 'good, beautiful' などの形容語とみて「良いトルコ人」と解する P. Aalto 説などがある [Aalto P., 1958, Materialien zu den alttürkischen

図 2　ノムゴン第 2 遺跡 (発掘前の空撮風景、2019 年)

図 3　キュル・テギン遺跡の犠牲石

図 4　ビルゲ可汗の犠牲石

図 5　ノムゴン第 2 遺跡の犠牲石

Inschriften der Mongolei, gesammelt von G. J. Ramstedt, J. G. Granö und Pentti Aalto, bearbeitet und herausgegeben von Pentti Aalto, *Journal de la Société finno-ougrienne 60/7*: 51; Clauson G., 1972, *An Etymological Dictionary of Pre-thirteenth Century Turkish*, Oxford: 843]。

また一方で、(3) 普通名詞説がある。この解釈は既述の F. ヒルトであり、先に挙げたビルゲ可汗碑文やイフ･ホショート碑文での例のように、Sir を古代テュルク系の薛延陀部族を構成した 2 つの部族 (薛部＋延陀部) の前者の薛 *siat の語に当てた。この説は W. W. ラドロフ、D. M. ナスィーロフ、I. V. コルムシン、S. I. クリャシュトールヌィなどが支持する [Кляшторный С. Г., 1986, Кипчакх в рунических памятниках, *Turcologica 1986: к восьмидесятилетию академика А.Н. Кононова*, Л: Наука: 153-164, 162 註 №2; 林俊雄・大澤孝 1999「イフ＝ホショート遺蹟とキュリ＝チョル碑文」『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』中央ユーラシア研究会:148-157 の林俊雄担当の訳注 p.156 Ｅ 9 も参照のこと]。V. リバツキー自身は最終的には、この普通名詞説を支持しているが、なお形容詞説も否定しがたいことを述べている。しかし、şir /sir を形容語「良き」とみた場合、トニュクク碑文 3 行目の文章は「Türk Şir bodun yerinte bod kalmadı(突厥の ' 良き ' 部民の地には、部族は残らなかった)」となるが、この場合、何故、同意語の edgü が使用されず、わざわざアルタイ語では稀な外来語特有の s/š 音を持つ用語が使用されたのか説明がつきにくい。むしろ、訳者は、トニュクク碑文における šir の使用された上記 3 行目ならびに第 11、60、61、62 行中での使用状況に着目したい [Tekin T., 1994, *Tunyukuk Yazıtı, Simurg*, Anakara: 2-3, 22-23]。上記の該当行では Türük Şir bodun の土地には部族がいなくなった事を述べていることから、その地はモンゴル高原を指しているとみなせよう、つまり、この場合、西暦 630 年に唐により滅ばされた突厥第一突厥国のあったモンゴル高原には、もはや部族が残らなかったこと、その後、唐の支配下で、華北・オルドス方面の草原や山地に強制移住させられて、糊口を凌いでいた突厥部民が結集し、唐からの独立運動を開始する場面でのみ使用されている。周知のように、突厥可汗国が 630 年に滅んだ後のモンゴル高原では、その配下にいた薛延陀部族による可汗国が成立したものの、これも 646 年には唐により滅ぼされ、モンゴル高原は唐の都護府による羈縻支配が施行された。こうした歴史状況を想起するのであれば、上記のトニュクク碑文の該当個所は「テュルクとシルの部民」というようにテュルク系部族の名称と見なすが至当と考える。尚、Sir を薛部の薛に当てるヒルト説は音韻的には可能ではある。例えば、突厥第 1 可汗国末期にひとたび、わずか 1 年とはいえ、可汗位に就任したものの、その後、唐の太宗による可汗国の崩壊する 629 年に唐に帰順した阿史那思摩（あしなしま）は、当初オルドス中南地方の化州で都督に任じられ、突厥遺民の統治を委ねられていた。その後、唐により北辺の防衛対策として、633 年頃に黄河北辺の地で突厥遺民やソグド遺民を統括することになったものの、翌年には遺民反乱の平定に失敗し、再びオルドス方面に逃避するに至った。当時、突厥に代わりモンゴリアを支配していた薛延陀の延陀部 (中古音 **jian-tha*) [Pulleyblank E. G., 1991, *ibid(訳註 13)*: 356, 514] 出身の統毗伽可賀敦 ton bilge qaγatun という称号を帯びた正式の妻を娶っていたことが唐昭陵の陪臣墓の墓誌 [陝西省古籍整理辨公室編 1993『昭陵碑石』13, 三秦出版社 : 113-114] に刻まれ、両部族が政略結婚で結びついていた様子が窺える [鈴木宏節 2005「突厥阿史那思摩系譜考」『東洋学報』87-1, 東洋文庫 : 58-59)。こうした当時の状況からすれば、「突厥と薛の部民」という表現は成り立つかもしれない。なお、何故、ここでは薛に比定される Sir のみが言及されて延陀に当たるテュルク語が省略されているのかという問いに対しては、突厥側では薛延陀の主要構成部族が薛部であるとの認識を反映した表記と見なす事も可能である。しかし 682 年当時の突厥の骨咄禄、イルテリッシュ可汗による唐からの独立運動時前後に、薛延陀が Türk(突厥部族) と共と同じく反唐運動に加わっていたことを証する別の史料は現時点では見当たらず、尚、慎重を要する見解ではある。また、薛延陀部を後のキプチャク系の部族とみなすクリャシュトールヌイ説であるが、既に林俊雄も指摘するように、シネウス碑文北面第 4 行目に見られる türk čaq「テュルクはちょうど」という字句を türk (qīb)čaq「テュルクとキプチャク」というラムシュテッド以来の誤解の読みにもとづく発想であり、従えない [林俊雄・大澤孝 1999:156 E9 を参照]。なお、突厥王族の出自部族である漢語名の「阿史那」の原語について、訳者はブグト碑文とカラバルガスン碑文のソグド文字表記の ašinas、突厥第二可汗時代のホル・アスガト碑文の ašinas や 9 世紀中葉にアッバース王朝下でカリフに仕えたテュルク系武人の名前である ašinas の存在からみて、「アシナス ašinas」が突厥姓の原名とする説を既に発表している [大澤孝 2010「ホル・アスガト碑銘再考」『内陸アジア言語の研究』XXV, 中央ユーラシア研究会 : 32,50-56 を参照のこと]。

019 年になされた発掘では 2 匹の子供を伴った状態で描かれた一頭の獅子像、犠牲石、墓廟建物に関係していたことが明白な各種の陶器、1 匹の雄羊の石像と他の遺物が出土した。

概して、”ノムゴン第 2” 遺跡の複合施設は、建

図 6　ビルゲ可汗遺跡マウンド内の獅子像

図 7　ノムゴン第 2 遺跡マウンドの二匹の子供をもつ獅子像

図 8　ノムゴン第 2 遺跡の発掘で発見された可汗の石像の頭

図 9　キュル・テギン像の頭（チェコスロバキア・モンゴル共同考古学調査 , 1958 年）

図 10　ノムゴン第 2 遺跡の発掘で発見された可汗の石像の下半身部分（2022 年）

図 11　キュル・テギン像の下部（チェコスロバキア・モンゴル共同考古学調査 , 1958 年）

築上の特徴と遺跡の複合施設の内部にある出土遺物の観点からビルゲ可汗とキュル・テギンの遺跡の複合施設 [Ser-Odjav 1979] と (石像 [Jisl 1960: 86-115]、犠牲石、獅子、雄羊の像や他の遺物の観点から) の類似点が明らかになった。我々が実施した発掘作業における出土遺物に注目すれば、この遺跡の複合施設が古代テュルク時代に建造されたこと、そして 1 人の可汗に関係していることに疑いはない。

■二匹の子供を伴う雄の獅子像

像は、体の下部で 2 匹の子供を守る 1 匹の獅子を表現している (図 6,7)。獅子は 2 つの耳を後方に向けて、座像として表現されている。垂れ下がった舌、隙間のある歯、大きく開けられた口がはっきりと見られる。三角状のあごひげは風に揺られた風情で、胸にくっついて止まっている。両目は怯えたように表現されている。獅子の両耳、両目、たてがみと尾がはっきりと見て取れる。左右の後ろ足は前方へ折り曲げられている。尾の一部は獅子の背中にみられ、たてがみのほうに向けられている。この獅子像を注意深く観察すると、その口を開き、歯がはっきりと認められるこの 1 匹の獅子の外観は、ある種の世界 (対象物) を保護しているとみることに誤りはない。芸術家はこの像によって、記念碑的な彫刻家に相応しい芸術を最高レベルで表出した。東西の国々で彼らの神話上で獅子は、“ 力をもち、強力で、恐るべき動物 ” の意味と共に、暗黒の力や諸悪に対してある種の守護者として尊敬されてきた。遊牧民の間では、獅子の姿は為政者たちの権力と狡猾さのシンボルを指し示す。古代テュルク時代に獅子は可汗たちの遺跡の複合施設だけにみられる。その理由はというと、遺跡の複合施設における獅子の像は、可汗の王朝と為政者たちの遺跡の複合施設でなされた儀式に特有の遺物と見なせるからである。

■可汗王朝のバルバルにおけるシンボル：“Eşir”(aşina) のタムガ

“ ノムゴン第 2” 遺跡の複合施設では東方に 47 個のバル

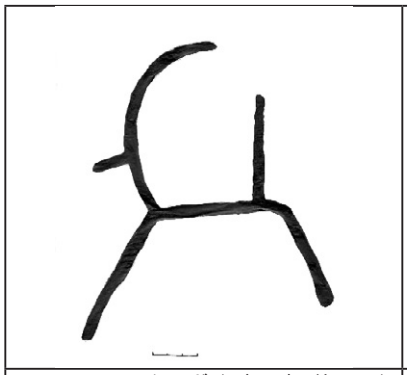

図 12　可汗のタムガ（バルバル第 1 石）

図 13　可汗のタムガ（バルバル第 2 石）

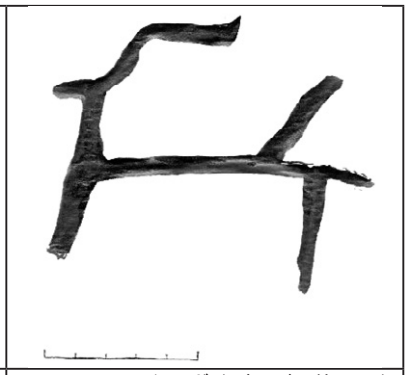

図 14　可汗のタムガ（バルバル第 3 石）

図 15　可汗のタムガ（バルバル第 4 石）

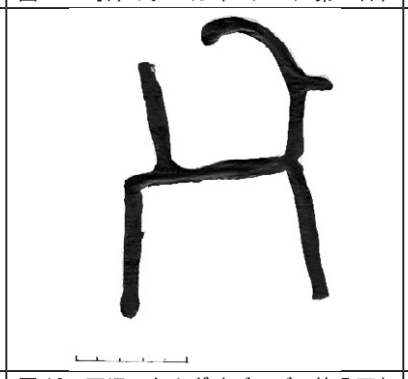

図 16　可汗のタムガ（バルバル第 5 石）

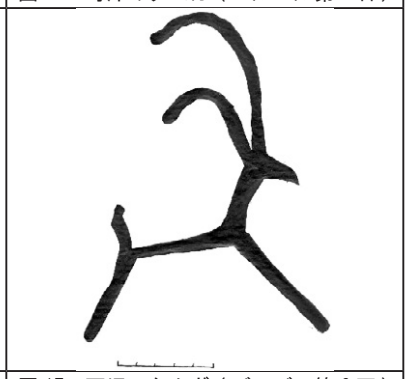

図 17　可汗のタムガ（バルバル第 6 石）

バルが確認された (図 12~17)。2019 年における発掘では、1 番目と 5 番目などのバルバル石の上に、”Eşir” (Aşina) の可汗王朝のタムガが見つかった [Kydyräli *et al.* 2019]。

2022 年に行われた発掘では、亀趺（きふ）台石の見つかった地点の傍らで 1 つの大きなバルバル石がさらに見つかった。遺跡の複合施設における最大の、そして先頭のバルバル石であるこのバルバル石には、可汗王朝のシンボルである “Eşir”(Aşina) のタムガが確認された。

このようにして、遺跡の複合施設にあるバルバルの数は 48 個に達した。上記で言及した 1 のバルバルから 5 番までのバルバル石と、16 番目のバルバル石には、発掘の際に突厥可汗王朝に関わる “Eşir”(Aşina) のタムガが見つかっている。これらのほか、20 番目のバルバル石には月形のタムガも確認された。

2. 2022 年のノムゴン第 2 遺跡の複合施設における考古学的発掘 (2

2022 年の発掘は、2019 年の発掘完了の後に埋め戻された区画の土を取り除き、平坦に整えることから始まった。関係地点の土を舗装し、発掘個所で定められた区画で作業が行われた。区画内の土壌輪郭と地層を明らかにして、遺跡の墓廟建物残部の右、左、および背面から断面を残し、写真と手書きの図面を作成した。

2022 年の発掘では複合施設の全体の面積、壁、外壁、土手、門など、建築構造が明らかになった。遺跡の複合施設の全体の大きさは 49 × 41.5 m と計測された。西から東へ延びた複合施設の周りは溝が掘られ、土を積み上げ、マウンドの周りを土壁が取り囲んでいたことが分かった。遺跡の複合施設の外周は青 (灰) 色の花崗岩製板石で取り囲まれていた。複合施設の西側には、中央に穴のあいた犠牲石が見つかった [Tseveendorj *et al.* 2019]。犠牲石の下

(2 “ノムゴン 2022” の共同発掘調査は、国際テュルク・アカデミー委員会からダルハン・クドゥラリ、ナピル・バジルハン、ヌルボラト・ボーゲンバエフ、モンゴル科学アカデミー考古学研究所中世班室長のアルタンゲレル・エンフトル博士兼教授、考古学者のツェレンハン・ボヤンヒシグ、ゴンチグ・バトボルドが研究グループに参加した。また、モンゴル国の諸大学の史学科学生も発掘調査に参加した。2022 年 7 月 28 日から 8 月 29 日の 30 日の期間において、発掘調査がなされた。

にある四角い台石の四隅を特定し、計測した。方形石の長さは 160cm、幅は 80cm、厚さは 14cm であることが判明した。

墓廟建物の屋根から散らばった屋根瓦の破片と土積を清掃してゆくと、構造形態とその規模が明らかになった。墓廟建物の壁には、叩きしめた土壌で作られた煉瓦が用いられていた。その構造の外面は石灰で塗られていた。漆喰(しっくい)の残滓がはっきりと見て取れた。墓廟建物の屋根を覆っていた屋根瓦は純粘土でできており、耐久性に優れている。このため、円形の木製鋳型に粘土を詰め込み、型を外した後 (専用のかまどで焼成され)(訳補 15、2 つに分割される。このようにして 2 枚の卵形の屋根瓦が得られる。屋根を覆う瓦の内面には、型に押しつけられた生地の跡がはっきりと認められる。ただ 1 点のみ、今日まで残っていた完形の瓦の長さは 34cm、幅は 13.5cm、厚さは 1.8cm であった。

墓廟建物の建設に使われたと思われる煉瓦がばらばらになっていることから、墓廟建物の内部が略奪に遭ったことが分かる。この煉瓦は広い区域に散らばっており、この散らばり方は、墓廟建物が崩壊したために生じた荒廃ではない。煉瓦は原地産の小石混じりの土壌から、独特の型で作られた。そして焼かれたのである。壊れなかった煉瓦の長さは 33cm、幅は 17.5cm、厚さは 6.8cm である。

可汗に関係したものと了解される石像は、今日までその位置は変わらなかったと我々は考えている。可汗の像は座像で示され、左手を膝に置いていた。石像腰部から上部は壊されていた。理解できる範囲で言うならば、略奪されたことが明確な墓廟建物を略奪者たちが崩壊させたとき、複合施設の西側にあった石像も引き抜かれたのであろう (図 8, 10)。

複合施設の西側には中央に穴の開いた犠牲石が見つかった。人形の像、2 匹の子供を伴う獅子像、2 匹の雄羊像も見つかった。複合施設の門の東側では 48 個のバルバルが見つかっている。このバルバルの下には、可汗の系譜に関する “Eşir” (Aşina) のタムガが確認された。

上述したように、遺跡の複合施設では 2 体の石像が見つかっている。雄羊像の頭部は破壊され、残りの部分は良い状態にある。すべての石像は色あせた大きめのサイズの花崗岩から作られた。

(訳補 15　カッコ内は訳者補。

遺跡の複合施設ではすべてで 6 つの石像が見つかった。これらのうち 1 番目のものは、1 人の可汗をシンボル化したと我々が考える像である (訳補 16。石像のあとに残されたものは、様々な場所で粉々になった状態で見つかった。

遺跡の複合施設の内部で墓廟建物の前方には 1 つの亀趺(きふ)が見つかった。東方を向く亀趺が最初の位置にあって、あまり (その位置は) 変えられていないものと我々は考えている。亀趺は良好な状態であるが、ただ頭の上部が壊されている。亀趺の上側には石碑を据えるためのくぼみが作られている。石碑を備え付けるこのくぼみの縦は 97.5cm、横 73cm、高さは 41cm である (図 28)。

発掘の空間で加工された丸石、玉座の残骸、馬と羊の骨、犠牲獣が料理された空間に関係すると我々が考える火が焚かれた場所の痕跡も見つかった。新発見のすべての出土物がスケッチされ、写真撮影され、データを伴う学術記録が作成された。

2022 年の発掘で最も重要な出土遺物は疑いようもなく、遺跡の複合施設の門の側で見つかった碑文断片である。この碑文断片は上で言及した亀趺に据え付けられていた石碑の最上部である。

■クトルグ可汗碑文の最初の読み

2022 年に行われた考古学的発掘において、上述した亀趺 (サイズ上述) と共に (訳補 17 碑文上部の壊れた断片が見つかった。碑文断片のサイズは 70 × 74.5cm、幅は 19cm である。共同発掘調査隊は 2023 年に碑文の残りの部分を探索し続ける予定である。

上述の碑文の各面は (碑文の両側面 / 両脇は伝統的に I ～ IV として番号が付せられた)、古代テュルク (ルーニック)(I, II, IV)、ソグド (ソグド語)(III) とブラーフミー 文字を伴う (IV-1) テキストに振り分けられた (図 18~27)。19 行で構成された碑文部

(訳補 16　この可汗の石像の頭は明るい色の花崗岩からなる。頭部の彫刻はキュル・テギンの石像の頭に似た冠帽の輪郭が描かれている。冠帽は五つの突起冠の形をしている。頭の天辺から始まる瞼は凸状にせり出し、鼻まで続いている。鼻は丸く、先端は丸みを帯びている。目はやや細く、顔は楕円形で、顎は丸みを帯びている。―モンゴル語報告文から引用]

(訳補 17　遺跡の入り口近くの地点から―モンゴル報告文から訳者引用]

左：図 18　ノムゴン第 2 遺跡の碑文（Ⅰ面）

右：図 19　ノムゴン第 2 遺跡（Ⅳ面）

図 20　ノムゴン第 2 遺跡の碑文（Ⅱ面）

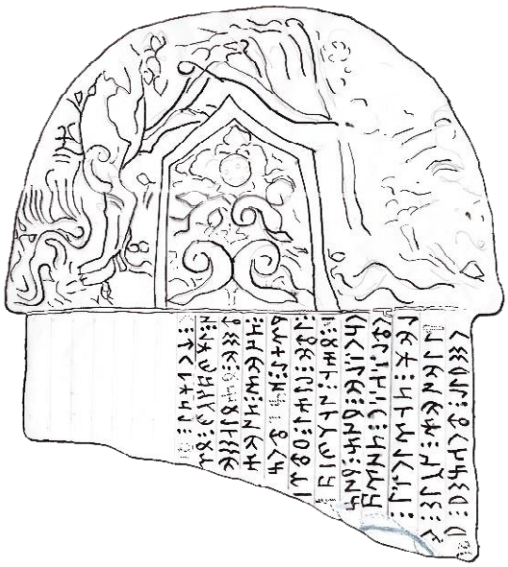

図 21　ノムゴン第 2 遺跡の碑文（Ⅱ面）
（拓本に依拠した描き起こし）

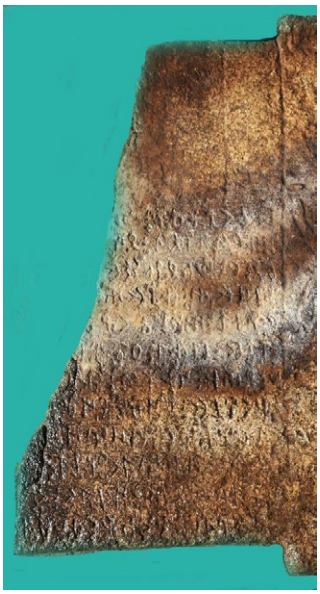

図 22　ノムゴン第 2 遺跡の碑文（Ⅱ面）. 碑文上部の古代テュルク語テキスト部分

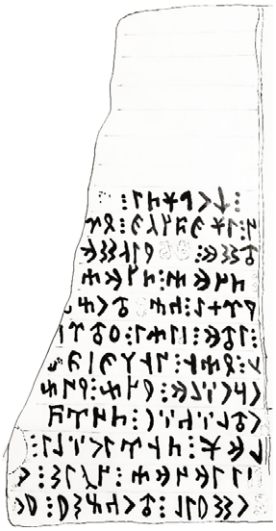

図 23　ノムゴン第 2 遺跡の碑文（Ⅱ面）（拓本に依拠した描き起こし）

分のうち、12 行がより良い状態で保たれていて、テキスト中のいくつかの文字は判読できないぐらいに磨滅してしまっている。古代テュルクの文字体系では、テキスト中の単語と単語グループを互いに区切る縦に 2 点並ぶ句読点記号 (:) の代わりに、3 点が並ぶ句読点記号 (⁝) が用いられているのが確認できる。碑文で使用された書体と字体は“チョイル”、“エル・エトミッシュ・ヤブグ”(オンギン)、“キュリチョル”の各碑文で使用された古代テュルクの文字システムの文字や書体との類似性を示している。書体や文字上のこの類似点から碑文が最古の碑文のひとつであると言うことができる。

碑文のソグド語テキストは広範囲で保護されているが、ただし、ブラーフミ―文字のテキストは読め

図 24　ノムゴン第 2 遺跡（Ⅲ面）.
碑文のソグド語テキストの部分

図 25　ノムゴン第 2 遺跡（Ⅲ面）.
碑文のソグド語テキスト部分の拓本に依拠する描き起こし

図 26　ノムゴン第 2 遺跡（Ⅳ～Ⅰ面）.
碑文のブラーフミー文字
銘文部分の拓本

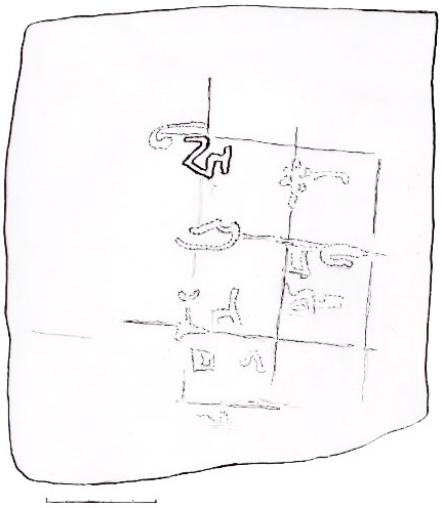

図 27　ノムゴン第 2 遺跡（Ⅳ～Ⅰ面）.
碑文のブラーフミー文字テキスト部分の
描き起こし

ない状態である。

Ⅳ．議論

“ノムゴン第 2” 遺跡の複合施設でなされた最終の発掘作業のあと、遺跡の複合施設が誰のために、あるいは誰の名前で建造されたのかというテーマについて、真剣な議論が始まった。我々は国際テュルク・アカデミーとモンゴル国科学アカデミー考古学研究所によって実施された 2019、2022 年の共同考古学的発掘における新たな出土遺物に依拠しつつ、この遺跡の複合施設が Qutluɣ qaɣan、すなわち、クトルグ可汗に捧げられたという見解に至った。彼はエルテリッシュ可汗 “Kutlug” の称号を 682 年の後に用い始めた、そして彼自身より前の河汗たちにはこのような名前のもしくは称号はない。中国の諸史料はクトルグ可汗に関して、“…Ashina(阿史那)Seli(Seri)(舎利)可汗王朝の親戚の Gudulo(骨咄禄)…” と言及している [Kazakhstan tarikhy... 2006: 179-180][訳補 18]682-692

(訳補 18　これは漢籍史料をベースに記されたと推察されるが、そうであればこの解釈は訂正を要する。以下の漢籍資料から明らかなように、「クトルグは阿史那氏族に出自し、頡利 (可汗) の傍流家に所属しており、その祖父はもともと、単于右雲中都督舎利元英配下の首領で、家は代々吐屯啜を世襲してきた」と訂正されるべきである。漢籍原文では、「骨咄禄者、頡利之疎屬、亦姓阿史那氏。其祖父本是單于右雲中都督舍利元英下首領、世襲吐屯啜」[『旧唐書』巻 194 上 , 突厥上，中華書局版 : 5167]、「骨咄禄，頡利族人也，雲中都督舍利元英之部酋，世襲吐屯」[『新唐書』巻 215 上 , 突厥上，中華書局版 : 6044] と記されている。なお、キュル・テギン碑文の西面の漢文面では、キュル・テギンは骨咄禄可汗の次子であり、苾伽可汗 Bilge qaɣan の弟であり、曾祖父は伊地米施匐 *Etmiš beg，祖父は骨咄禄頡斤 *Qutluɣ irkin と述べられている。訳者は 1996 年および 2008 年 8 月に現地で本碑文の表面調査を実施し、漢文面の字句を確認している。また、そのあと、杉山正明教授の計らいで、京都大学文学部所蔵のキュル・テギン碑文

碑文テキスト			
各面の名前	行	古代テュルク語テキストの転写	日本語訳
I	1	?	
	2	?	
	3	?	
	...?	?	
	行	古代テュルク語テキストの転写	日本語訳
II	1	ud yïl: toquzunč: ay: [y…….]	ウシ年⁝九月
	2	[al]tïm: ü[mü]n: üčünčü [k…….]	私は [得た] ⁝ ..... 第三の
	3	almïš:Teŋri: oγlu: […….]	得たところの ⁝テングリの⁝息子⁝ [　] .....
	4	[Q]utluγ qaγan: Türük […….]	［ク］トルグ カガン⁝テュルク . [....]
	5	ur oγlum: yüz yüz […….]	我が息子 ⁝ 100 100　[.....]
	6	biziŋ:öŋlüg: [k…….]	我々の ⁝すばらしい⁝　[.....].
	7	ïtdïm: bizi: yat er: […….]	私が作った⁝ 私たちを⁝ 横になれ　兵⁝ [.....]
	8	yerde: qa[z].. tuz…..[…….]	場所で⁝　掘る [.....]
	9	tümen: tümen: […….]	万（テュメン）⁝ 万（テュメン）[.....]
	10	atadïm: bin biŋdim […….]	私は名付けた⁝　乗れ、私は 1000.?[.....]
	11	isig :küčüg: ber[….....]	労を⁝　力を ⁝　与え [- ....]
	12	es[?] :qop ešti […….]	知恵 (?) ⁝　とても聞いた [.....]
	13-19		
	行	古代ソグド語テキストの転写	日本語訳
III	1	……	
	2	Qutlug x’g’n …..	クトルグ・カガン
	3	……	
	4	……	
	5	……	
	6	tti……	
	行	古代テュルク語テキストの転写	日本語訳
IV	1	?	
	2	?	
	3	?	
	...?	?	
	行	古代ブラーフミ―文字碑文の転写	日本語訳
V -1	1	?	
	2	?	
	3	?	
	...?	?	

クトルグ可汗の遺跡の碑文の最初の試読

年の間、“Elteriş qaγan” として知られるクトルグは、その弟の Qapaγan カパガン(訳補 19)、エルエトミッシュ・ヤブグ(訳補 20)とビルゲ・アパ・タルカンのトニュ

の拓本を調査する機会を得たが、上記言及の字句に関して特に問題がないことを確認している。この漢文面に関しては白鳥庫吉の「突厥闕特勤碑銘考」[『白鳥庫吉全集』第 5 巻 , 岩波書店 ,1972 年 , pp.23-44] を参照。なお、骨咄禄の出自に関しての諸記録の照合に関しては、小野川秀美 1943「突厥碑文譯註」『満蒙史論叢』4, 日満文化協会 :152, 註 243] を参照。

(訳補 19　この称号は兄の可汗の死後に名乗った称号であり、通常 Qapγan カプガンと転写される。即位前は「黙啜ボグ・チョル (Bögü čor)」と名乗っていた。

(訳補 20　オンギ碑文では El etmiš yabgu と記され、唐代の漢籍では “ 咄悉匐 ” Duoxifu (中古音 **tuət*、**siet*、**b’iuk*) [Karlgren B., 1972, *Grammata Serica Resensa*, Stockholm: Museum of Far Eastern Antiquities: No.496, 1257, a, 933m] と記された人物に比定される。訳者は三つ目の匐 **b’iuk* の語はテュルク語の氏・部族長の beg の漢語表記として表記されることがあること、その前の 2 語の咄悉は人名か、称号に相当するとみなし得る。かつて J. マルカルトはこれを Tusik beg と推定復元したが、訳者は河西ウイグルの漢語「咄」が古代テュルク語で tr と表記される事例に照らして、*Turs beg に当てることを主張している。これに関しては、次を参照のこと [ŌSAWA Takashi, 2011, Revising

ククと共に 10 年、タブガチ (唐―訳者補) に対して何度も戦った、そして彼が費やした努力の後に、突厥人たちは主権を獲得した。クトルグ可汗はすべての遊牧民を蒼き旗の下に集め、突厥可汗国を再度活気づけ、国家の基礎を安定化させ、強力な可汗国として大勢力へと変えたのである。

“ ノムゴン第 2 遺跡 ” の複合施設で見つかった古代テュルク語の碑文テキストにある “ud yïl:toquzunç: ay”、すなわち “ ウシ年 9 番目の月 ” という表現は、おそらく 668、680、692 年 (訳補 21 のいずれか 1 つを指し示している。碑文の残りの部分が発見されることは、碑文断片に示された日付けが明らかにされるという観点から重要であり、非常に多くの不明な点が解明され得る、と我々は考えている。

クトルグ可汗、つまり、エルテリッシュ可汗と関係する古代テュルク諸碑文での表現を覚え書きとして以下のとおり記載し、(本遺跡の解明に) 役立てたいと考える。

■ “ チョイレン ” 碑文 (第 3 行目) :

“Elteris qaɣanqa qoñ yïl üčünčü ay jetiqa adïrïldïmïz”
「エルテリッシュ可汗を、我々は、羊年の 3 番目の月に (訳補 22 失った」

■エルテミッシュ・ヤブグ碑文 (オンギン碑文) (第 11 行目) :

“Elteris qaɣanqa: adïrïlmaduq: yaŋïlmaduq: Teŋri: sintine: qaɣanta: adïrïlmalïm: azmalïm: tejin: anča: ötledim: keri: barïɣma: buqadï: bilge: sintine: ...: ....bardï: ülügen atqa: esig: küčüg: berti:「エルテリッシュ可汗を我々は失った (訳補 23。誤らなかった。我々は貧しくならないでおこう、と私たちを、有能な可汗から離すためにテングリに祈願した (訳補 24。

図 28　ノムゴン第 2 遺跡、碑文の発掘する際に見つかった亀の台石 (亀趺)

戻って、我々は加わった。..... 有能な可汗の男たちは ... 行った。” 我々の労働と我々の力を分担の称号に与えた (訳補 25。

■トニュクク碑文 (第 6~7 行目) :

Bilge: Toňuquq: Boyla Baɣa Tarqan: birle: Elteriš qaɣan: boluyu: beriye: Tabɣačïɣ: öŋre: Qïtañïɣ: yïrïya: Oɣuzïɣ: üküš ök:ï benurti (訳補 26: bilgi (訳補 27: ök: ertim: Čuɣay quzïŋïn: Qara Qamuɣ: olurur: ertimiz:「ビルゲ・トニュクク、ボイラ・バガ・タルカンである私はエルテリッシュ可汗と共に、(訳補 28 右手 (南) 側では中国を、左側へは (訳補 29 契丹を、左手には (訳補 30

the Ongi inscription of Mongolia from the Second Turkic Qaɣanate on the basis of rubbings by G. J. Ramstedt, *Journal de la Société Finno-Ougrienne 93*, Helsinki: 182, note No.11]。

(訳補 21　モンゴル語報告では、これに引き続き 704、も記されている。

(訳補 22 原文には「7 日に」の文字が欠けている。

(訳補 23「エルテリッシュ可汗から我々は離れなかった」と訳すべきである。

(訳補 24　このオンギ碑文の箇所の訳文は全くの間違いで訂正を要するが、ここではそのまま訳出している。また、2 行目の文は原文では「テングリ・ビルゲ可汗から離れないでおこう。過ちを犯さないでおこう」と、そのように私は進言した」と訂正すべきである。また次の文章は「ilgärü barïɣma: bardï..bilgä qaɣan: bodunï...」(先に行くものは去った。ビルゲ可汗の部民は…) と訂正すべきである。

(訳補 25　ここは ölüg(g)en atqa と転写して、「亡き人の名声、もしくは無くなった父 (ata) に我々は奉仕した」と解釈すべきである。

(訳補 26　この引用がどの研究を根拠になされたのか不明であるが、突厥銘文に照らせば、ここには üküš ök ölürti と転写すべきであろう。

(訳補 27　報告文中には書かれていないが、突厥銘文に照らせば、ここには bilgäsi: čabïši: bän が入るべきであろう。

(訳補 28　原文では脱落しているが、上記の転写に忠実に従えば、ここには「エルテリッシュ可汗になってから」という訳文が必要である。

(訳補 29　ここは「前方」、すなわち「東側」に訂正すべきであろう。

(訳補 30　ここは「北側」に訂正すべきである。

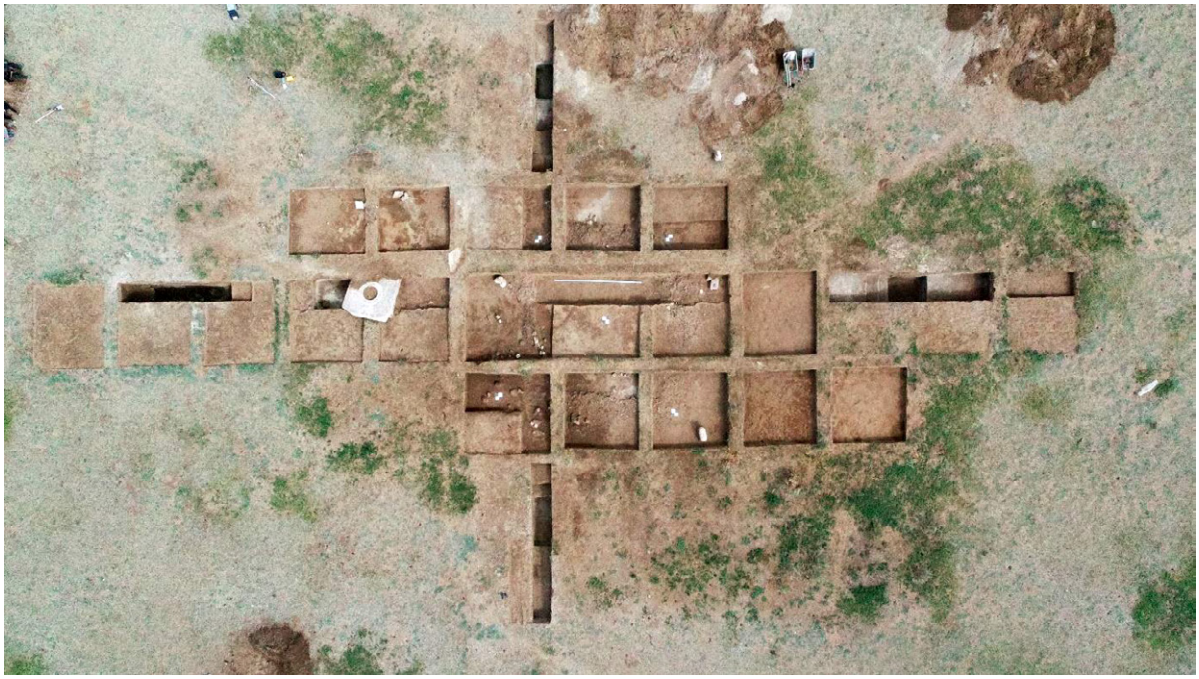

図 29　ノムゴン第 2 遺跡のマウンド（発掘の際の航空写真，写真天が北，2022 年）

オグズ族を征服した（訳補 31、質の高い講師であった（訳補 32。陰山（チュガイ）の森林で、黒沙（クムカブ）で我々は居住していた。

（第 50 行目）：

Elteriš qaγanqa: .... učdï: Türük Bögü qaγanqa: Türük Bilge qaγanqa: ...「エルテリッシュ可汗は ... 飛翔した (死んだ)、テュルク・ボギュ可汗、テュルク・ビルゲ可汗 ...

（第 61 行目）：

Elteriš qaγan: Bilge Toñuq-uq : qazγantuq üčün: Qapγan qaγan: Türük Ešir budun: yordïqï bu「エルテリッシュ可汗とビルゲ・トニュククは勝利したので、カプガン可汗がテュルクのエシルの部民の発展は、ほら、このようである」(トニュクク碑文テキストからの引用)[Kydyräli 2020: 368; Kydyräli 2022: 125]。

Ⅴ．結論

古代テュルク集団では、可汗の本営に建てられた遺跡の複合施設もしくは儀礼上の複合施設は、まず神聖な場所である “koruk”(「保護所」)（訳補 33 として認識され、その後は “bark”(墓廟建物―訳者補) と名付けられた。この複合施設が建設された土地は、可汗の財産となったようであり、その後は家産として保護された。今日においても、現地住民はこの場所を神聖な場所と見なしており、保護している。

一般的に、ノムゴン第 2 遺跡の複合施設は、様々な特徴面で、ビルゲ可汗とキュル・テギンの遺跡の複合施設と重要度において類似性を示している。ノムゴン第 2 遺跡の碑文上部には、2 匹のオオカミが表現されている。タスパル可汗（訳補 34、ビルゲ可汗、キュル・テギンと他のいくつかの遺跡のある丘にも

(訳補 31　ここは「たくさん殺害した」とすべきである。

(訳補 32　ここは、「彼の賢（ビルゲ）であり、彼のチャブシュは私自身であった」と訳出すべきである。

(訳補 33　この koruk の語は現在のトルコ共和国トルコ語にも、またカザフ語にもこの文脈に適用される単語は存在しない。この文脈にあうのは、チャガタイ語の koruk ’prevention, guarding’, and metaph. ‘ a meadow or pasture which is protected from grazing for the sake of the cattle of the Sultan’s overseers、すなわち “ 支配者にとって保護された草原；禁域 ” が該当しよう [Clauson S. G., 1972, *An Etymological Dictionary of Pre-thirteenth Century Turkish*, Oxford: 843b]。

(訳補 34　この読みは 1971、1972 年にソ連のクリャシュトールヌィとリフシツによる当初の読みをそのまま踏襲したものである。現時点では、吉田豊のブグト碑文の新解読に従い、Tatpar qaγan「タトパル可汗」を本来の読みとすべきである。以下を参照のこと [吉田豊・森安孝夫 1999「ブグト碑文」『モンゴル国現存遺蹟・碑文調査研究報告』中央ユーラシア研究会 :122-124]。

この種の可汗の資質である――オオカミの頭をもつ絵が刻まれていることが知られる[訳補35] ノムゴン第

図 30　“ノムゴン 2022”プロジェクトの共同考古学調査で碑文を発見したメンバー（2022 年）

左から：G. バトボルド（モンゴル）、N. ボーゲンバエフ（カザフ）、A. エンフトル（モンゴル）、エレグゼン（モンゴル国，モンゴル考古学研究所所長）、D. クドゥラリ（カザフスタン，国際テュルク・アカデミー所長）、N. バズィルハン（カザフ）、Ts. ボヤンヒシグ（モンゴル）

2 遺跡の碑文は、オルホン遺跡のような国家レベルで重要な碑文として認められなければならない。

銘文テキストから得られる情報からは、ノムゴン遺跡の複合施設は突厥可汗国を再興したキュル・テギンとビルゲ可汗の父クトルグ・エリテリッシュ可汗に捧げられたという結論になる。

クトルグ・エルテリッシュ可汗は、突厥可汗国を再興し、西方へは鉄門にまで、東方へはボクリ (kore 朝鮮) 半島まで強大な帝国を建設した最初の支配者であった[訳補36]。キュル・テギン碑文では、彼自身の

(訳補 35　唐の玄宗皇帝の命により派遣された官僚により彫られたビルゲ可汗とキュル・テギンの碑頭の両脇に刻まれた像が龍であることは自明の理であり、これを狼とみなすことは許されない。またブグト碑文の碑頭の両脇に刻まれた動物については、1971、1972 年の A. Ya. リフシツ、S. G. クリャシュトールヌイの解読発表以来、突厥の狼祖伝説を表現したものとの着想から、乳児が手を伸ばして雌狼の乳を吸引する姿を表現したものと考えられてきた [Кляшторный С. Г., Лившиц В. А., 1971, Согдийская надпись из Бугута, *Страны и народы Востока 10*, Москва:ГРВЛ: 121-146; Kljaštornyj S. G., Livšic V. A., 1972, The Sogdian Inscription of Bugut Revised, *Acta Orientalia Academiae Scientiarum Hungaricae 26-1*, Magyar Tudományos Akadémia: 69-102]。その説は未だに、現在のトルコ共和国のテュルク民族主義を掲げる見解を主張する研究者の他、旧ソ連内のカザフスタン、クルグズスタン、ウズベキスタン、テュルクメニスタン、アゼルバイジャンなどの中央アジアのテュルク系諸国の研究者に加え、狼祖伝説を取り込んだ元朝秘史の記載を信じるモンゴル人の間に信じられており、研究者も例外ではない。しかし訳者は 1996 年以後、複数回に亘り、現地調査を実施したが、碑文残部からは乳児の姿は認められず、それは龍の後足表現の残部とみなすべきと判断する。本来は、碑頭上部の右側の欠けた個所にも動物像が彫られていたことは、碑石裏面のブラーフミー文字碑文の碑頭上部の右側にも掘られていることから推察できる。つまりブグトの碑頭脇には中国の碑石に象眼されたと同様の“2 匹の龍”が彫られたとみなすべきである。そもそもブグト碑文冒頭箇所にはこの碑が「仏法の石」として建造されたことが銘記され、仏教文化との関わりの中で立てられたことが知られる。557 年にタトパル可汗支配下のモンゴリアには北斉からガンダーラに仏典を求めた沙門の宝運（ほうせん）ら 11 名が途中滞在し、またエフタル配下のソグディアナから北周を経て突厥国に入ったガンダーラ僧のジーナグプタが側近として仕えていたこと、彼自身が慧琳など北斉高僧の助言を得て仏教に改宗し、浄明、涅槃、華厳等の経や十誦律（じゅうじゅりつ）を求めたこと、また伽藍を建設して塔をめぐりつつ日々祈願をしていたことなどからも、中国の仏教文化と親しむ環境が整っていたことも考慮されるべきである [山崎宏 1947『支那中世仏教の展開』清水書店 :882-885]。同様の見解はドイツの考古学者 S. スタークも中国本土の文化的影響としてブグト碑文の動物は龍と認識している [Stark S., 2022, Hükümdarlık topraklarında sanat: Bizans, İran ve Çin arasaında kalan Türklere ait yerleşim bölgelerinde lüks malların birikimi ve üretimi (yaklaşık 550-750), *Ötüken'den İstanbul'a Türkçenin 1290 Yılı (720-2010)*, İstanbul: 58. [「支配者の領域における芸術：ビザンツ、イラン、中国間で残されたテュルクに関する定住域における奢侈品の集積と生産 (550~750 年前後)」『ウテュケンからイスンタンブルまでテュルク語の 1290 年 (720~2010 年)』]]。

(訳補 36　ここでの「ボクリ」という表現に関しては、突厥碑文の表記に従えば、Bök eli「貊（パク）の国」と読まれ、時代的には「高句麗国」に相当する。この復元案に関しては以下を参照のこと [護雅夫 1977「いわゆる bökli について」『江上波夫教授古稀記念論集　民族・文化編』山川出版社 :299-324]。

ことに関して以下のような表現がみられる。

「テュルクの部民が無くならないように、と部民であれ、と我が父イルテリッシュ可汗を、我が母イル・ビルゲ可敦を蒼穹の天辺から掴んで、より高く持ち上げたのではなかったか。我が父である可汗は 17 人の男と蜂起した。(イルテリッシュ) が蜂起した、と情報を得て町に居るものは山に登った。山に居るものは (町へ) 下った、集まってまとまって 70 人となった。テングリが力を与えたので、我が父は、部民の兵士はオオカミのようであった。敵は羊のようであった。東方にも、西方にも遠征をして (男は) 集まった)。そしてあつまった。(最終的には) 全部で 700 人となった。700 人となって国の無い、可汗のいない部民は女奴隷となった、男奴隷となった部民はテュルクの習慣と慣習を投げ捨てた部民は我らの先祖や我らの祖先の法に従い、(新たに) 創り、訓育した」

クトルグ可汗は、10 年の (治世の) 間に唐などの敵に対して 40 回以上も遠征を行った。軍を大きな戦争で統括した。そして勝利を得た有名な可汗である。国際テュルク・アカデミーとモンゴル科学アカデミー考古学研究所は出来るだけ最短で、“ ノムゴン ” 渓谷で行われた共同学術調査の結果を含む学術出版を準備しており、学界の注目するところとなろう。アカデミーは、本テーマと関係してテュルク諸国の首都で学会も開催することを計画している。モンゴル国におけるテュルク時代に関する諸遺跡の発掘はこれからも継続されるし、そうすべきである。

参考文献：

Bayar D.: Баяр Д., 2010, Новые находк археологических памятников древних тюрков в Монголии, *Uluslararası Zeki Velidi TOĞAN ve Türk Kültürü Sempozyumu. 13-15 Ekim, 2010 yılı*, Afyon Kocatepe Üniversitesi, (Bildiri olarak sunulmuştur). [「モンゴリアにおける古代テュルク記念碑の新発見」『ゼキ・ヴェリディ・トガンとトルコ文化に関する国際シンポジウム 2010 年 10 月 13-15 日』アフィヨン・コジャテペ大学 (発表原稿)]

Bayar D.,2012, Moğolistanda Eski Türklere ait yeni arkeolojik buluntular, *Uluslararası Türkçe Edebiyat Kültür Eğitim, Sayı: 1/1*, Cengiz Alyılmaz: 6-25. [「モンゴル国の古代テュルクに関する新たな考古学的発見」『国際トルコ文学・文化教育』1/1: 6-25]

Bayar D.: Баяр Д., 2014, Новые находки археологических памятников доревних тюрков в Монголии, *Монголын дундад зууны археолгийн судалгаа. Бүтээлийн эмэхтгэл, Боть III (2004-2010 он)*, Улаанбаатар: «Удам соёл» хэвлэлийн компани: 106-112. [「モンゴルにある古代テュルクの考古学遺跡の新たな資料」『モンゴル中世の考古学的研究』III 巻 (2004-2010 年) オラーンバータル :《遺伝》出版社 .]

Enkhbat G., Davaatseren B., Bold B.: Энхбат Г., Даваацэрэн Б., Болд Б., 2012, *Монгол нутаг дахь түүх. соёлын үл хөдлөх дурсгал, VIII Дэвтэр. Булган аймаг,* Улаанбаатар: Соёлын өвийн төв. [『モンゴリアの歴史文化遺産』8 巻 ボルガン県(アイマク),オランバートル : 文化遺産センター]

Enkhbat G., Ankhsanaa G., Davaatseren B.: Энхбат Г., Анхсанаа Г., Даваацэрэн Б., 2013, *Монгол нутаг дахь түүх. соёлын үл хөдлөх дурсгал, X Дэвтэр. Архангай аймаг*, Улаанбаатар: Соёлын өвийн төв. [『モンゴリアの歴史文化遺産』10 巻 アルハンガイ県(アイマク), オランバートル : 文化遺産センター]

Enkhtor A.: Энхтор А., 2001, *Номгон хөндий дэх эртний Түрэги онгон цогцолборууд*, Археологийн хүрееленгийн гар бичмэлийн сан хөмрөг: 25. [エンフトル , A.『ノムゴン渓谷の古代の古墳群』(考古学学研究所手稿庫資料): 25]

Jisl L. 1960, Vyzkum Külteginova pamatnfku v Mongolske, *Lidove Republice, Archcologicke Rozhledy 12-1*: 64, 86-115.[「モンゴルのキュル・テギン記念碑に関する研究」『考古学的考察』12-1: 86-115]

Kydyräli D., Tseveendorj D. Enkhtor A., Bazilkhan N., Dalantai S., Bogenbaev N., Buyankhishig Ts.:Кыдырәлі Д., Кыдырәлі Д., Цэвэндорж Д., Энхтор А. Базылхан Н., Далантай С., Богенбаев Н., Буянхишиг Ц., 2019, *«Номгон-2019» бірлескен экспедициясы аркеогиялык казба зерттеулерінің ғылми есебі*, Астана: Халыкаралык түркі академиясы, Монголия Тарих, археология институты: 80. [『“ ノムゴン 2019” 共同遠征の考古学的発掘調査の科学的報告書』アスタナ : 国際テュルク・アカデミー : モンゴルの歴史・考古学研究所 : 80]

Kydyräli D.[ed.], Кыдырәлі, Д. [ред.], 2020, *Тоныкук. Бітіктасы мәтіннің аудармалары: әзәрбайжанша, казакша, кыргызша, түркше, татарша, тываша, монголша, мажарша, немісше, орысша, ағылшынша, французша, корейше, кытайше, тілдерінде*, Халыкаралык Түркі академиясы: «Ғылым» баспасы:125. [『トニュクク碑文のテキストの翻訳 : アゼルバイジャン語、カザフ語、キルギス語、トルコ語、タタール語、トゥヴァ語、モンゴル語、ハンガリー語、ドイツ語、ロシア語、英語、フランス語、韓国語、中国語による』国際テュルク・アカデミー : ギリム出版社 :125.]

Kydyräli D.: Кыдырәлі Д., 2022, *Күлтегін. Бітіктасы мәтіннің аудармалары: әзербайжан, казакша, кыргызша, түркше, татарша, тываша, монголша, мажарша, немісше, орысша, ағылшынша, французша, корейше, кытайше, тілдерінде*, Халыкаралык Түркі академиясы: «Ғылым» баспасы: 363. [『キュル・テギン碑文のテキストの翻訳 : アゼルバイジャン語、カザフ語、キルギス語、トルコ語、タタール語、トゥヴァ語、モンゴル語、ハンガリー語、ドイツ語、ロシア語、英語、フランス語、韓国語、中国語による』国際テュルク・アカデミー : ギリム出版社 : 363]

Kazakhstan tarikhy...: 2006, 2-болім Әулетік тарихи жулнамалар, *Казахстан тарихы туралы кытай деректмелері, IV том*, Алматы: Дайк Пресс: 179-180. [「第 2 節 王朝の歴史的年代記」『カザフスタンの歴史についての中国資料』4 巻 , アルマトイ : Dayk Press: 179-180]

Mönkhturga R.: Мөнхтурга Р., 2019, Тонюкукийн гэрэлт хөшөөнийн бичээсийн äšir хэмээх нэрийн тухай, *Ази судлал, Олон улусын эрдэм шинжилгээний тавдугаар хурал, vol.V*, Ulaanbaatar: 633-637. [「Tonyukuk 碑文テキスト中の äšir という名前について 」『 アジア研究：第 5 回国際学術会議』5 号 , オランバートル : 633-637]]

Очир А., Odbaatar Ts., Erdenebold L., Ankhbayar B.: Очир А., Одбаатар Ц., Эрдэнэболд Л., Анхбаяр Б., 2009, Номгоны түрэг дурсгалууд, *Нуудэл судлал 16*, Улаанбаатар: 35-47. [「ノムゴンのテュルクの記念碑」『遊牧研究』16, オランバートル :35-47]

Ser-Odjav N.: Сэр-Оджав Н., 1979, Хүл Тэгиний буршнаас олсон хүн чулууны толгой, Археологийн судлал, Tomus. I, Fasc. 6: Ураанбаатар: 8.[「キュル・テギン記念碑で発見の寺院で発見された石人の頭」『考古学研究』1 巻 (6), オランバータル : 8]

Tseveendorj D., Kydyräli D., Enkhtor A., Bazylkhan N., Dalantai S., Bogenbaev N., Buynkhishg Ts.,: Цэвээндорж Д., Кыдырәлі Д., Энхтор, А. Базылхан Н., Далантай С., Богенбаев Н., Буянхишиг Ц., 2019, *Монгол улс-Олон улсын Турэг академийн хамтарсан «Номгон» төслийн 2019 оны хээрийн шинжилгээний ажлын тайлан*, Ураанбаатар: 45. [『モンゴル国と国際テュルク・アカデミー共同の「ノムゴン」プロジェクトの 2019 年の野外調査作業報告』オランバートル :45.]

Shiveet ulaan...: 2018, Шивээт улаан көнө түрік ғұрыптык кешен, *Археологиялык зерттеудің фотоальбомы*, Астана: «Гылым» баспасы: 272-Б. [『シヴェート・オラーン , 伝統的な儀式の複合体 . 考古学調査の写真』アスタナ : ギリム出版社]

要旨

国際テュルク・アカデミーとモンゴル科学アカデミー考古学研究所の共同調査隊はモンゴル国のアルハンガイ地方のハシャート・ソムのノムゴン渓谷で、古代テュルク時代に関する 9 つの遺跡の複合施設において、2019 と 2020 年に発掘を実施し、考古学的発見をするに至った。“ ノムゴン -2” の遺跡の複合施設で実施された発掘では、本テーマである遺跡の複合施設が、東突厥第二可汗国の創始者で、682-693 年の間に君臨したビルゲ可汗とキュル・

Abstract

The Joint Staff of the International Turkic Academy and the Institute of Archeology of the Mongolian Academy of Sciences carried out excavations in 2019 and 2022 in the Nomgon valley of the Khashat Sum region of the Arkhangai region of Mongolia and made archaeological discoveries in nine complexes of monuments of the ancient Turkic period. It is believed that the monument complex, which appeared during the excavations in the “Nomgon – 2” complex, was

テギンの父、エルテリッシュ可汗 (クトルグ可汗) の名で建造されたものと評価されている。考古学的発掘作業の間には、この遺跡の複合施設の状況から、一人の可汗に関するものとして我々が考えてきたひとつの石像の頭部、胴体の断片、２匹の雄羊、子供と一緒に作られた一匹の獅子の石像、屋根瓦、煉瓦、穴の開いた供養石と ”Eşir”(Aşina) の可汗の家系のタムガのような、各種の遺物が発見された。この発見は世界のテュルク学にとって、特別の意義あるものと見なされる真の問題点は何かというと、発掘した領域内で発見された碑文断片である。碑文断片は当該地方で継続調査の際に発見された最初の碑文であるという観点からその重要性を提起している。碑文上部では二匹のオオカミ (龍とすべき－訳者補) とひとつの蓮の形状をした花が描かれている．碑文では、テュルク語、ソグド語とブラーフミー文字からなる三種の異なった言語に関わるテキスト断片が存在することが証されている。碑文の下部と理解される亀趺も発見された遺物に含まれている。

キーワード：

クトルグ可汗、エルテリッシュ可汗、古代テュルク文字、ソグド文字、ブラーフミ―文字、碑石、碑文、遺跡の複合施設、獅子と雄羊の石像、犠牲石、亀趺、瓦、煉瓦

formed in honor of the founder of the Second Eastern Gokturk Khaganate, who ruled in 682-692, Ilterish Khagan (Qutluq Khagan), the father of Bilge Khagan and Kultigin.

During the excavation works, various finds such as the head and lower part of a statue in the form of a Khagan, two rams, a statue of a lion made together with their cubs, roof tiles, bricks, sunag stone with a hole in the middle and the stigma of the “Ashir” (Ashina) Khagan generation were revealed from the monument complex. The main feature of this discovery, which makes it important for Turkology world, is a piece of written monument found from the excavation site. This is significant in that it is the first inscription found in studies carried out in the region. Two wolves and lotus-shaped flowers are depicted at the top of the inscription. Texts in the inscription were written in three different languages - old Turkish, Sogdian and Brahmi. The turtle statue, which is understood to be the pedestal of the monument, is also among the finds.

Keywords:

Qutlug Khagan, Ilterish Khagan, ancient Turkic inscription, sogd inscription, brahmi inscription, written monument, inscription, monumental complex, ritual complex, statues of lions and Aries, sunag stone, turtle pedestal, tiles, bricks.